



## キリストの聖体 (ルカ 9:11b-17)

生活全体がキリストの愛に養われているか

先週、主日のミサが三回ありまして、繰り上げミサと6時のミサで「主の昇天」と「キリストの聖体」はなぜ「主日」とタイトルにつかないのか？という説明を、間違っていました。

この二つの祭日は、伝統的に木曜日に祝われていました。それを日本の教会は、木曜日では集まれない人が多いので、日曜日に振り替えている。この点を説明しなければなりません。申し訳ありません。この説明を、長崎で行われた「教区司祭黙想会」で思い知らされました。

黙想会木曜日のことです。午後の講話で福岡教区のアベイヤ司教様がこう切り出しました。「ローマでは本日、キリストの聖体が祝われています。私たちもその雰囲気を始めましょう。」ローマでは木曜日に祝われ続けている。私は間違った説明をしたことを思い出し、本当に恥ずかしい気持ちになりました。

キリストの聖体の祭日、本日午後5時から聖体賛美式もありますので、アベイヤ司教様の講話を参考に説教を進めていきたいと思えます。四日間の黙想会全体に言えることですが、司教様の講話はとても力強く、生き生きとしていました。基本を押さえながら、司祭たちが何かに気付く、そのためのお手伝いをしてくださったと思えます。

ミサは「記念」と言われます。最後の晩さんの記念です。キリストが残された愛の記念です。記念するのですが、記念を行うことで、私たちが「キリストの記念」となる。講話はここから始まりました。

「ありがたいものを託されたので、記念し続けます。」それだけではなく、私たち自身が「キリストの記念」になっていく。そこまで聖体の秘跡は私たちを招いている。なかなかその考えまで思い至りません。やはり、適切な指導を受けて黙想することは大切だと思った次第です。

ほかにもいろいろ考えるヒントを頂きました。それについては午後の聖体賛美式の祈りで紹介しますので、その時に味わいましょう。ここではもう一つだけ、キリストの聖体が信じる人にとってどれだけ支えになっているかを紹介して終わりたいと思えます。

アベイヤ司教様は教皇フランシスコからまず大阪大司教区の補佐司教として、酒井補佐司教様と一緒に司教に任命されました。その後福岡の司教に任命されたのですが、司教になる前はご自分が所属しているクラレチアン会の総長として、ローマで十年間務めていました。

その間は全世界七十カ国に派遣されている会員を回って励ましたりしましたが、極寒の地シベリアの会員を訪ねた際に、会員が「総長様、隣の小教区を訪ねてください。そこは派遣されていた会員の司祭が亡くなってから56年間ミサが行われていません。ぜひ行って、56年ぶりにミサをささげてください。」シベリア鉄道で4時間の場所でした。

考えられるでしょうか？56年前にミサが途絶えたまま、ずっと司祭なしで信仰を守り続けていました。そしてたくさんの方が、56年ぶりの

ミサにあずかってくれたのです。聖体の秘跡は、人々を生かすために与え尽くされたイエスの命です。その愛の秘跡をいただくミサを、56年待っていてくれたのです。

私たちも考えなければなりません。私たちはどれくらいミサを真剣に受けとめているのでしょうか。コロナ禍でミサが途絶えて再開した時に「ああ、またミサにあずかることができる」と喜んだはずです。私たちは1ヶ月とか2ヶ月待ったわけですが、お話に登場した人々は56年待ちました。これは、一つひとつのミサを、司祭はより真剣にささげ、みなさんはより真剣に参加する。そのきっかけになるのではないのでしょうか。

ご苦労だとは思いますが、もう一度、夕方5時に、聖体賛美式においで下さい。私たちの救いのために、惜しまず与え尽くした愛の記念を、もう一度賛美しに来てください。今日の聖体賛美式が、聖体の秘跡と生活の繋がりを深めるきっかけになりますように。

年間第13主日(ルカ 9:51-62)